
魔法の法律的解釈

佐村 蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法の法律的解釈

【Nコード】

N4612T

【作者名】

佐村 蒼

【あらすじ】

私は弁護士になるために、真面目に勉強してただけー！。

そこに突然現れた、謎の妖精（？）クノスは、私に『魔法の改正作業』を依頼した。え？魔法って法律の一種なの？

納得しないまま連れて行かれたのは、魔法学校。『魔法の改正作業』なるもののために、魔法学校にて魔法を学んでくださいと言われて…。23歳にもなつて、高校生扱いが哀しいです。

そんな魔法学校での日常的物語。恋愛は途中から入る予定。

*法律とはありますが、知らなくても全然問題ありません。

序章（前書き）

初めて投稿します。

なにか間違い等がありましたら、ご指摘いただけると幸いです。
どうか少しでも多くの人に楽しんでもらえたら嬉しいです。

序章

この世の中には、様々なルールが存在する。

それは自然法則という、人には触れられないものであったり、法律という人の作ったものであったりする。

自然法則は常にそこにあり、人は躍起になってその解明を目指し。

法律はいつかの時点で作られ、人は時代によってそれを作り変える。その二つは、相反するものであって、混在しない。

しかし、魔法は。

手段であると、方法であると考えられながら、実は、社会を壊さないために出来た法である。

自然法則のような顔をしながら、社会の秩序を維持するために誰かに作られたものである。

ただ、その誰かは…。

人ではない。

1、六法に『魔法』はありません（前書き）

連続投稿です。

何か設定の間違い、誤字・脱字などありましたら、ご指摘いただけると幸いです。

1、六法に『魔法』はありません

確かに私は、法科大学院生だ。

世間一般の人に比べたら、ある程度法律の知識はあるでしょうとも、ええ。

しかし、法学研究科生の方が、よっぽど専門的に勉強しているだろうし、そもそも法律を作れというのならば、内閣法制局にでも行けばいい。

それに。わざわざ法科大学院生に声かけなくたって、弁護士さんに声かけた方がよっぽどいいんじゃないのか。法科大学院生の目指す先は、（大抵）弁護士だ。

なのに。

見慣れない、ふよふよと浮かぶ『それ』は、私がいいのだと言い張る。

「だーからー、若くてまだ勉強してる人間の方がいいの！だから弁護士と内閣法制局の人は却下！」

ひどい言い草だ。

すごい人たちなのに。

「それに、専門的に研究している人間じゃなくて、実際に浅く広く活用している人間の方がいいんだってば」

活用っていうなら、やっぱり弁護士のほうが…。

「人の話聞いてた？魔法を一から知ってもらわなきゃいけないから、すでに働き始めた人間よりも、日常的に勉強している方がいいんだって言うてるでしょ」

……。

キミは、人なのかね？

「ねー、そうやって、揚げ足とって面白いの？いい加減、認めれば？」

「…私の頭がおかしくなったことを？」

「本気で怒るよ」

私の目の前の『それ』は、小さいながらも本当に怒っているかのように、肩を震わせた。

多分、怒っているんだと思う、目の前の『それ』は。

「それ、それ、って言わないでくれる？俺には、ちゃんとクノスって名前があんの！」

「はあ…」

「まったく、なんでそう…」

目の前の『それ』、もとクノスは、またブツブツとぼやき始めた。可愛い顔…というより、全体的に可愛い外見をしているくせに、随分とおじさんじみている。別におじさんくさいのが悪いってわけじゃないけどさ。

ああ、こういうのをギャップ萌えっていうんだね。

「違うから。聞いたことある単語適当に使うの、やめろ」

クノスの笑顔が、一際怖いものになったところで、私は脳内垂れ流し状態の独り言を止めた。

こんな事態に陥ったのは、一時間ほど遡る。

今日の授業と、明日の予習と、明後日あるゼミのための論述をひとつ終わらせて、一人暮らしの家へと帰宅したのが午後10時。

この時間が早いか遅いかは人によるだろうけど、私にしては少し遅いくらいだった。

夕飯はすでに、学校の近所で済ませてあり、今日は択一の問題集（司法試験対策ってやつだ）を30分くらいしたら、シャワーを浴びて寝ようなんて思っていた。

とりあえず着替えて、お茶を淹れて、テレビをつけて。テレビをつけるのは、一人暮らしを始めてからの習慣で、音がないとなんとか寂しいからだ。

ひと心地ついたところで、問題集をやるうと六法と問題集とノート

を用意し。

ペラリ、といつものように六法を開いた瞬間に、それは起こった。

ポン、と軽快な音を立てて、私の目の前に『それ』は現れた。

「お、ラッキー。結構可愛い女の子じゃん」

そして『それ』は、まるで10代の男の子のような口を聞き。

思わず、ページとページの間に現れた『それ』を、六法を閉じて潰そうとした私をどうか叱らないでほしい。

「危ねえじゃん！」と『それ』は言っただけども。危ないのは、私の頭の方だ。

どうした、私？

勉強のしすぎと、司法試験へのプレッシャーでついに頭がおかしくなったか？

いやでも、一日8時間は少ないほうだし、司法試験まではあと一年以上もある。いやいや、精神を病むのに、他と比較しても意味はない…。

「やつほー。俺のこと見えてる？聞こえてるよな？」

訳が分からなくて、混乱していると、『それ』は私の目の前へと飛んできて、ヒラヒラと小さな手を振った。

そう、『それ』は小さくて。まるで、妖精か、小人か。

ふよふよと空中に漂っているのをみると妖精のようだが、別に羽根は生えているわけではない。

見た目はそう、ちょうど10代の男の子のようで。

これが、体長15センチではなくて、175センチだったら、きつとモテたに違いない。

まあ、服装はどうにかした方がいいと思うけど。

黒いマント、もしくはローブ。

法曹を目指している者としては、法服に似ていると一瞬思ってしまったが、少し長さが足りない気がするし、なによりも裁判官に失礼

だ。なんとなく。

「ねえ、もうぼーっとするの終わりでもいい？俺の話、聞いて欲しいんだけど」

「話？」

「そう、俺はアナタに用事があつて来たんですよ」

「そうなんだ…、私にはないので、お引取り願えませんか」

「俺にはあるって言うてるじゃん！」

若いから少しは柔軟性期待してたのに、全然だめじゃん、と『それはばやき、気を取り直したようにニツコリ笑った。

その笑顔は可愛いな、と思ったところで、『それは意味の分からない言葉を告げた。

「アナタに、『魔法』の改正作業を頼みに来ました」

「は？」

今、何を？

「だから、魔法の改正作業」

「魔法？」

「魔法」

……。

どうしたらいいんだろう。私、魔法とかつて信じてたっけ。

「あんたさ、法律の勉強してるんでしょ？」

確認するような声色に、思わずコクリと頷く。

「色んな法律を勉強してるんでしょ？」

いくつか色んなという形容詞を使えるかは知らないが、一応10以上は勉強しているので、これにもコクリと頷く。

「だから、俺はあんたのところに来たの」

…全然、話が繋がりません。

「あのね、魔法ってのは、ある種のエネルギーを使用するときのルールなわけ。その使用自体を魔法っていったり、そのエネルギーの

方を魔法っていうことも多いんだけど、本来の意味は、そのエネルギーを使用するときの人の決めた決まりごとなんだ。ここまでは分かる？」

「もしも、魔法というものが存在するならば、の仮定の話で聞いていいならば。」

「それでいーよ。でね、法律が古くなって現代社会に合わなくなつて改正を必要とするみたいに、魔法も改正が必要なの。なんだけど魔法を扱う人間って、扱うことに満足しちゃって、どうしてそんなルールがあるのかとか考えたこともない人間が多いんだよね。研究っていうと、新たな力の発現とか、魔法薬の研究とか、そんなんばつか」

「それで？」

「だから、さ。法律に詳しそうな人間に、魔法の改正を頼もうと思つて」

「あ、選び方は抽選だから」と『それ』は楽しそうに笑い、「アナタは抽選に当たりました、おめでとう！」なんてふざけたことを言うから、やっぱり六法でつぶしておくべきだったなんて思つてしまつた。

「法律に詳しい人間は、他にもいっぱいいるし、だいたい法科大学院生よりも、弁護士の方がいいと思う」

「えー、ダメー。これでも抽選の前に、結構条件絞つたんだから！」
「条件の絞り方がおかしいと思う」

「そんなことないって！いいでしょ、あんたが選ばれたの！」

「いいでしょー、と私の周りをふよふよと飛ぶ『それ』を見つめながら、ふと我に返った。」

「なんで、私これの言うこと聞いてるの？」

「そもそも存在を無視しなきゃいけないんじゃないのか。いわゆる幻覚と幻聴ってやつでしょ、これ。」

「あ、俺ね、クノスっていうの。ええと、あんたは…あ、沙耶^{サヤ}って言うんだー」

「え!？」

思わず名前を言い当てられて、ビックリする。いや、私の幻聴なんだから、私の名前が分かって当然なんだけど。

「書いてあったよ」

すごい勢いで振り向いた私に、そう言つて『それ』が見せたのは、『それ』がさつき出てきた六法だった。

あー、皆同じものを持つてゐるから、一応名前書いておいたんだつた。「可愛い名前だね」

自分で、自分の名前を可愛いというのはいかなものか。

「ねー、俺の存在認めてくれたんじゃないのー」

断固、認めません。

「じゃあ、魔法の改正作業してくれる話はー？」

そもそも魔法が存在しないので、そんなことは出来ません。

「えー。さつきは真面目に話聞いてくれてたのにー」

そんなこんなで。

似たような問答を繰り返しながら、冒頭へと戻るのである。

クノスは、だいぶイライラしているみたいだった。

私だつてそうだ。こんなしょうもないやり取りを一時間も続けたら、誰だつて嫌になる。

もう眠りたい。眠つて明日の朝になれば、全部夢だつたつてことにしたい。

これが幻想であれ、現実であれ、どのみちやっかいな事態には間違いないのだから。

「ねえ、もういいでしょう。私寝るよ」

今日の分の勉強、全然出来なかつたな。そんなことを思いながら、私はごそごそとベットにもぐつた。

「はっ?こら、待てつて!もう、信じないと大変な目に遭うよ!？」
知りません。もう何にも聞こえないふり。

そうすると。クノスはふうと一際大きな溜息をついて。「強制手段

だけは使いたくなかったんだけどなあ」なんて恐ろしい台詞を吐き。
「全部、あんたが悪いんだからね」
そう言った。

次の瞬間、私は白い闇の中へと突き落とされた。

1、六法に『魔法』はありません（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。

自分が法律を勉強している身なので、どのくらいの単語までが一般用語なのかよくわかっていません。

分からない単語等ありましたら、聞いていただけると嬉しいです。

ちなみに。

本話でいう「六法」とは広辞苑のような厚さのある「六法全書」ではなく、普通の国語辞典や英和辞典などの大きさのサイズのもです。コンパクト六法とか言います。これに基本的に使う法律が載っているのです、特殊な分野の勉強でない限り、用が足ります。

2、未知ならぬ魔法との遭遇（前書き）

連続投稿第2弾。

2、未知ならぬ魔法との遭遇

ベッドの中にいたはずなのに、布団にもぐっていたから、暗いはずなのに。

ガクン、と衝撃を受けて目を開けば、そこはどこまでも白い空間。目が痛いほど、白い。そして、どこまでもなにもない。右も左も。前も後ろも。

そして、上も、下も。

私はそこを漂うのではなく、ずうっと下まで落ちていくようだった。何も目印になるものはないのに。あ、空気抵抗を感じている？

けれど、髪が上になびくとか、部屋着のＴシャツがはためくとか、そんな現象は一切生じてない。なのに、わかる。落ちている感覚。なにこれ、どんな悪夢なの。

「まだ夢だと思ってる」

隣で声がした。振り向いてみれば、クノスがふよふよと浮いていた。

「なによ、これ……!!」

私の声はヒステリックに甲高く、どこか冷静な自分が恥ずかしいと言っていたけど、今はそんなことを気にしている余裕はないのだ。なんなのだ、これは。早く目を覚ましたい。覚まさせて。怖い怖いこわい……!!

「怖い？ただのワープ空間だけど、いうなれば」

「なんでもいいから、とめてっ!」

このどこまでも落ちていく感覚が恐怖だった。ふよふよと自力で浮いていられるクノスにはわかるまい。

「しょうがないなあ」

そう言っつて、クノスが私の肩を、軽くピンと指で弾くと。

私の身体は、ふわりと何かに受けとめられたかのように止まった。「信じた？」

「…何を」

「魔法の存在とか、俺の存在とか、その他もろもろ」

「…信じた」

信じてないといって、またあの恐怖は体感しなくなかった。

どうしてだろう、何もない空間にいるのは変わらないのに、落ちる感覚が止まっただけで、随分落ち着いた。

いや、この空間も怖いんだけど。白い分、ただの闇よりも、何も無いことを教えるから。

『孤独』という恐怖を味わわせるには最適、っておい。

「すぐに出るよ、沙耶が信じてくれたから」

「え？」

「信じてくれたら、魔法が発動できる。空間魔法を使えば、一発でココをぬけられる。ただし、本当に信じた？」

「え、と、信じてないとどうなるの？」

「魔法を信じていない者に活用した場合、活用した者及びその対象者は、滅失又は損傷する」

この場合、魔法を対象にされた物、すなわち私が滅失又は損傷すると。…え？

「信じてないなら、沙耶は重症を負うかもしくは死んじゃうから、しない。本当に信じてる？」

もう一度確認するように聞かれて、私は必死に考えた。信じているか否か。

とりあえず、クノスの存在は信じられるようになってる、と思う。

なんか落下を止めてくれたのは、魔法っぽい。ベッドの中から、この白い空間に出たのだって魔法みたい…あれ？

「ね、この空間に来たのと、さっき私を止めたのは、魔法じゃないの？」

「ん？魔法っていえば魔法だね。沙耶のベッドの床とここの空間繋がったから。だから、沙耶自身には魔法はかかってない。もうひとつも同じ、魔法をかけたのは空間の方。沙耶と空間の結び目をひとつ

外しただけ」

「…なるほど」

原理は良くわかんないけど。そうであるなら、この空間にいるのが夢じゃないって思えばいいんだよね！これは現実、これは現実、これは現実！

必死に思い込もうとすればするほど、何故か頭が許否してくる。

だって、これが現実なんて。なんて悲しいんだろう。私、まだまだ死にたくなかったよ。

「なんかまた余計なこと考えてない？なんで泣きそうな顔してるわけ」

「…私、やっぱり死んじゃうの？」

「死なない。時間軸もいじってあげるから、本来の沙耶の世界に戻るときは、さっきの二時間後くらいになる。ちゃんと戻れるから」

死なないどころか、戻れるの？同じくらいの時間に？

「本当に？」

「本当に」

それが、本当なら。ちょっとこの事態を現実だと認識してもいい。一瞬で顔を輝かせた私に、クノスは本当に呆れたような、くたびれたような顔をして、でも「じゃあもう魔法かけていい？」と聞いただけだった。

「うん、多分大丈夫」

これは現実、これは現実、これは現実！

なんだか、おまじないになりそうだな、これ。

「じゃあ、いくよ」

クノスが私の額を指でツンと触って。低く何かを呟いた瞬間。

目の前が一瞬まばゆく光って、次の瞬間には、落下の衝撃が来た。

「うぐっ」

「ちよっとちよっとー、もう少し可愛い声出せないの」

可愛い声って言ったってね、いきなり落とされてそんなことまで計算してられませんよ。

私がムツとしたのが伝わったのか。

「だから、ちゃんと計算してベッドの上に１メートル以内の高さで落としたでしょ」なぞと、クノスは言う。

計算するなら、きちんとベッドの数センチ上から落としてよね！と、クノスの声が、さっきよりずっと低くなっていることに気づいて、ふと周りを見渡せば、そこはどこか知らない場所で、近くに誰か立っていた。

その誰かの足元から、ゆっくり上へと視線をずらせば、そこにはクノスそっくりの顔があつて。

「ちゃんと１７５センチだよ、よかったね」

なんて、クノスより少し低めの声——さっき、私がクノスだと思っていた声がした。

「クノス、なの？」

「そう、まあこれは仮の姿で、さっきのが本当の姿なんだけどね」そう言つて、クノスはくすくすと笑う。彼の顔は整っているから、そういう仕草が良く似合っていた。

まあ、生憎それに見惚れるほど、若くないんだけどね。

「えーと、クノスって何者？」

「あれ、ここがどこかつてことより、俺の正体の方が気になっちゃう？」

クノスがからかうように言うから、なんとなくムカつときて、思わず「全然」なんて冷たく答えてしまう。

クノスが何者なのか、今私が頼れるのはこの人（人か？）だけなんだから、ちゃんと知っておいたほうがいいんだろうけど。

でも、この場所も大事だよ！一体、クノスは私をどこに連れてきたのか。

「まあ、本当は連れてくる前に説明するつもりだったんだけど、どこかの誰かさんがまるで聞く耳もたないから」

「突然あんなこと聞かされて、はいそうですか、なんて信じる人いないわよ」

「そう？巷では、魔法学校の物語がはやってるって聞くけど」

それは、某イギリスの魔法学校の物語のことだろうか。だって、あれは物語だし、大体魔法の改正を頼まれたりしてないし。

「それで？ここはどこなの」

見渡すと、ここは誰かの一人暮らしの部屋のようにだった。

私が今いるベッドとその向かい側にタンスとクローゼット、足元の方に作りつけの机と本棚、頭の方にサイドテーブルがひとつ。それが、八畳ほどの部屋にあって。

床には、ふかふかのラグ。机のある方に、ガラス戸があって、綺麗なスカイブルーのカーテンが揺れている。

全体的に、青と白と水色で可愛らしくまとめてある部屋だが、…どこよここ。

「ここは、魔法学校の寮。沙耶の部屋」

「…はい？」

「一応、沙耶好みの部屋になってるはずだけど。まあ、沙耶の部屋ほど雑然としてないけど、それは自分でやるかな、って」

「汚い部屋で悪かったわね…」

さらりと嫌味を言うんじゃない！

「まあ、詳しい説明は、校長と寮長に挨拶した後ね。とりあえず、」

「魔法学校へ、ようこそ」

クノスのニツコリ笑顔に、もう何度目になるか分からない頭痛がした。

3、嬉しくない歓迎ってあるんですね（前書き）

連続投稿第3弾。

これにて、一度終了です。

3、嬉しくない歓迎ってあるんですね

よく分からないままクノスに促され、部屋の外へ出ようとし。

そこで、自分の服装に気が付いた。部屋着のままだから、Ｔシャツに綿のハーフパンツっていうすつごいラフな格好だ。

このままで、初対面の人間には会いたくない。クノスには会ってるけど、それはこいつが勝手に出てきたからであるから、カウントにはいれない。

ドアの前で立ち止まった私を、クノスは不思議そうに見てから「ああ」と納得したように、頷いた。

「えっと、もしかして着替えたい？」

「もしかしなくても着替えたい……けど。えっと、私の服ってあるの？」

私の部屋とは言われたけど、そんなふうにも何も揃っているの？

「タンスとクローゼットの中に何着か。俺、外に出てるね」

そう言っ、クノスはヒラヒラと手を振って、ドアの外に出て行った。うん、こういう察しのいいところは好感がもてるよなあ。いきなり拉致はどうかと思うけど。

そんなことを考えながら、タンスとクローゼットを開けてみる。

私が着るには、いささか若い雰囲気服だな、と思いながら、まあいいかと、薄いピンクのシャツに、白のスカート、グレイのカーデイガンを含ませた。下はストッキングにして。

そういえば、靴は？と思って、玄関と思しき場所にいけば、壁に作りつけの靴棚があつて、何足かのパンプスと、ミュールが一足あつたから、黒のパンプスにした。

校長と寮長、と言っていたから、もう少し固い雰囲気の方がいいんだと思うけど、生憎ここにはジャケットやら、スーツやらないのだから仕方がない。

余り待たせるのも悪いので、その格好で外に出れば、すぐ横の壁の

ところでクノスは待っていた。

壁にもたれている格好が、こうも決まるってすごいな。

「大丈夫？あ、可愛い。でも、ちょっと大人っぽすぎない？」

「校長先生とかにお会いするんでしょう？もう少しフォーマルでもいいくらいだけど」

「そうかなー。校長って、要は俺のおじさんだからさー、別に部屋着でも良かったくらいだよ？」

「それは、クノスにはいいかもしれないけどね…」

私は、そのおじさんにとって赤の他人なんだから、きちんとするのが当たり前ではないですか。

「でも、おじさんだよ、沙耶に改正を手伝ってもらって決めたの」……。

「き、気に食わない相手でも、礼儀を欠いていいことにはならないでしょ」

「なんか沙耶って大人って感じだねー」

「…一体、いくつに見られてるの」

大人、大人って。私、今年で24歳なんです。とくに成人してるんですが、学生だけど。

「え、17、8歳？」

「…23歳」

いいや、後数ヶ月は23歳だから。それでも、5、6年サバが読めてしまう自分の童顔が哀しい。

「…え、嘘でしょ？頑張っても、20歳にも見えないよ」

「失礼すぎると思わない？だいたい、キミの言ってた法科大学院生は22歳が最年少だよ」

法科大学院は、一応大卒が受験資格だから、本来は23歳なんだけれど、いくつかの大学には飛び級制度があって、大学三年生で卒業したり、法科大学院に受験できたりするようになってるから、最年少は22歳だ。

大体、17、8歳じゃあ高校生でしょうが。

「うん、魔法の改正をする人間にしちゃ若いつて思ってたけど…、それだけ適応能力が高いってことなのかなとか思ってたけど…、そっかあ23歳かあ…」

そんなふうにしみじみ言われると、なんだかイラっとしてしまう。お前が勝手に間違えたんだろうが！

「あ、ごめん、ごめん。じゃあ、校長室へと参りましょう」

私のイライラに気づいたのか。クノスはエへと可愛らしく笑うと、私を校長室へと促した。

魔法学校の寮と、学校自体は併設して作られていて、その二つをつなぐ回廊が複数——四本くらいだったか——ある。

寮は、中央塔と呼ばれる建物に、食堂とラウンジと売店と、後いくつかの多目的ホールや演習室、自習室などがあって、そこから右側が男子寮、左側が女子寮になっているらしい。

クノスが校長室まで歩きながら教えてくれたのは、そこまでだった。しまった、生活環境が気になって、寮のことばかり聞いてしまったけど、これから校長先生に挨拶するなら、学校のことについて聞いておくんだった。

でも、私をこっちへ連れてくる原因となった人物なら、そこまで気にすることないのか。

クノスは軽くノックをするだけで、返事を待たずにドアを開けると、「連れてきたよ、おじさん」なんて軽い感じで声をかけた。

なまじドアが重厚で、校長室っていうより、どこかの会社役員の部屋みたい（ドラマでしか見たことないけど）って思っていた分、クノスのその気軽さに、一瞬ぎょつとした。

彼に促され、部屋の中へと入れば、ドアの正面にこれまた重厚な机と椅子があつて、でもそこには恰幅のいい狸親父ではなく、ロマン・グレーの紳士然とした男性が座っていた。

「キミが、新宮 沙耶さんだね？」

「…はい」

あー、前言撤回。この人、ちゃんと狸だ。

「碌な説明もなしに、悠斗がこちらに連れてきて悪いことをしたね」
自分は悪くないです、って？とここで悠斗って誰だ。クノスのこと、
でいいのかな。

怪訝そうな顔をしてしまったのか、校長先生はクノスの方をチラリ
と見る。すると、さっきまで後ろに控えていたクノスがあわてて口
を挟んだ。

「ごめん沙耶、俺この姿のときは黒須 悠斗って名乗ってんの」

名乗ってる、ってことは、「黒須悠斗」の方が、偽名なんだ。まあ、
小さいサイズのほうが本物だって言ってたもんね。

「そういうことは、先に言っておきなさい。まあいい。沙耶さん、
悠斗から何故こちらに呼ばれたのかは聞いているかな？」

「魔法の、改正作業をするためだ、と」

「そう、キミに魔法の改正作業を頼みたい。細かい文言や、付け加
えて欲しい文章がある」

校長先生は、私がそれを納得しているかのように、しごく当然に話
を進める。だけど、ちょっと待つて欲しい。

「それは…、魔法を良く知っている人間の方がいいのではないです
か？」

「そうだね、魔法については、当然知っていなくてはならない。し
かしね、やはり法というものは時代に合わせるべきだ。そう思わな
いかね？」

「思います、ね」

そう、法律はいつまでも古いままでは、とても使い勝手が悪い。そ
れに新しい制度や、新しい道具、犯罪だって新しい形態になっ
てい
るのに、規制をする方が古いままでは、うまく規制できなくて、そ
もその法律の意味がなくなってしまう。

まあ、法律が変わるたびに、方法だって変わるんだから、イタチご

つこつていえばそうなんだけどさ。

「魔法も同じだ」

「しかし、私は魔法がどのように変化し、その部分が対応できなくなっているのか、知ることはできません」

「それはこれから学べばいい。資料から、その変化を読み取るのは、一種の能力だ」

「その、どういう意味でしょうか」

「あるのは、ただの事実の羅列だ。そこに変化を読み取り、規制対象を見つける。それは、訓練した者しか出来ない」

「私は、そのような大それたことは、してきていませんよ」

「そうかな？事実から、法的な問題を読み取る。それが今のキミのやっていることではないかね？」

「問題は、そこにあります。それをどう法律に当てはめて解決するのか、それが今私のやっていることです」

「同じだよ。問題はすでに生じている。しかし、どのような決まりを作れば、それが規制できるのか、我々にはわからないんだよ」

「そう言っつて、校長先生は悲しそうに顔を伏せて、静かに溜息をついた。これを演技だといってしまう私はひどい人でしょうかね」

「だって、このままじゃ。私、本当に魔法の改正作業をさせられることになっちゃう」。

大体魔法が何かも良く分かってない上に、立法のことだって分からないんだもの、そんな話、引き受けられないよ。せめて、立法学の授業だけでも履修しておけばよかった。

「クノス、…黒須君にも言いましたが、」

言葉を発した私に、校長先生は視線だけをあげる。その視線に一瞬たじろいだけど、私はそのまま言葉を続けた。

「私には、そのような能力はありません。もう少し、立法に携わる人間に頼んだ方がいいです」

本当に。立法つて、結構面倒な作業なんだよ。

法律を学んでいると、結構欠陥もある気がしちゃうけど、それでも

法律がこれだけ体系立てて作られていることに感動を覚えたりもする。

条文と条文が、法律と法律が矛盾しないように作るというのは、結構大変な作業じゃないのかな、と思う。

そして、また言葉使いがやかいなんだよー。そんな細かいことまで私知らないよー。

「キミはそう言うが、」

視線だけは、私から外さないまま、ゆっくり校長先生は顔を上げた。ああ、この人はちゃんと人の上に立つ人間なのだかと、そう思われる威厳たつぷりに。

「キミほどでギリギリなのだよ。このような異世界に理解を示せるのは」

「理解…？」

「多くの人間は、現実逃避してしまうだろう。そして、無理矢理ココに連れてこさせれば、理解できずに発狂してしまうのではないかなと思う」

何故か、ストンと腑に落ちてしまった。何故、自分だったのか。

ある程度 of 法律知識の習得と年齢。そして、環境変化の適応能力。

「それとね、この作業のためには魔法を勉強してもらわなければならない」

「魔法を…、ああそうですね」

それと、学ぶ能力、か。いくつになっても、人は学ぶことは出来るけど、暗記力なんて一定年齢で落ちてしまうから、そういう意味でも年齢は重要だったのか。

「納得を、してもらえたかな？」

私の表情を読んだのだろう。校長先生は、ニッコリと狸の顔をして笑う。少し悔しいが仕方がない。

「納得、しました」

「よかった。それでは、具体的な話を進めよう」

「…お願いします」

なんだか、出来の悪い生徒をなだめたみたいになって、少し癪にさわるけどね。

「ああそうだ」

校長先生は、何やら書類を用意していたが、いきなり声をあげて私を見た。

「ええと」

その朗らかな、楽しそうな顔に、狸親父と言ったことに少しだけ反省する気持ちになった。…が。

「ようこそ、魔法世界とウライア魔法学校へ」
ニツコリ笑えば、やっぱり狸親父なのだった。

だから、歓迎されたくないんだってば！

3、嬉しくない歓迎ってあるんですね（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。

まだまだ話は動き出していないですが、次回も読んで下さると嬉しいです。

4、問題は山積みです

時間がたつのは早いもので、すでにこの世界に連れてこられてから三日が経過していた。

たった三日間なのに、あれもこれもと話が進められていて、いつのまにか私はこの寮で生活し、魔法学校に入学することに決まっていた。

クノスも一緒なんだそうだけど、そもそもクノスが一体いくつで何者なのか、誤魔化されたままでは私は聞けてない。

ウライア魔法学校。正式に言えば、その日本支部。

魔術の能力を持つ人間には、15歳になると葉書が届いて、この魔法学校に入学が許可されるらしい。

何故15歳なのかといえば、義務教育を終えた後という配慮なんだそう。

そついう意味でいけば、魔法学校っていつでも、専門科のある高校と一緒だよ。

ここは、私がいた世界とは別次元の空間にある世界で、魔術を行使する人間のために作られた社会がある。

だけど、元の世界、即ち日本社会に戻ることもあるから、義務教育は終えていなさいってことみたい。

この世界にも国の概念というのはあつて、だから国や地域ごとに『魔法』も少しずつ違うし、学校も別なんだそう。

各国に法律があるのと一緒に、って言われたけど、自然法則は世界共通だし、それで納得してもいいのかな。

ちなみに、魔術っていうのは、いわゆる私達のいう魔法のこと。

こちらでは、『魔法』イコール『使用時のルール』だから、あえてその使用行為や力自体のことを『魔術』といって区別するらしい。

…ややこしいとか思っちゃうけど。

魔術というのは、一種の能力で、いつてしまえば芸術家なんかと同じらしい。

人と異なる感性、すなわち魔術を感じる力を持つ人間は、その力を行使することが出来る。

その能力は放置しておくのは本人にも、周囲にも危険だから、こうして魔法学校に入学させ、魔法を学ばせるのだそうだ。コントロールできるように。

なにより、魔術の能力を持つ人間は、その力に惹かれて、その力を自在に操ることの出来ることを望んで魔法を学ぶんだって。

そんな説明を、初日の校長先生の挨拶が終わったあとにクノスはしてくれた。

だって、あの狸親父、「一週間後に、この学校に入学してもらいます」とだけ言つて、制服渡しておしまいだったんだもの。

どこが具体的な話だったの！

まあとにかく、そんな説明を聞いて驚いていた私に、クノスは「沙耶も入学するんだよ？」と言い、そこで私はようやく重要なことに気がついた。

「あのさ私、魔法、じゃなくて魔術の能力ないんだけど」

「そうみたいだね…。普通、12歳くらいには分かるらしいから」

「そうみたい、じゃなくて。入学したら、まずいんじゃないの？あ、特殊な扱いになるの？」

「どうやら、魔法の改正作業なんて、特殊なことのために呼ばれたらしいし。少しだけ一緒に勉強を…みたいな感じで。」

「うっん、一緒に学生やるんだよ。1年生から、卒業まで」

「…え？」

「一応魔法の改正つて、秘密事項なんだよ。みんな、その魔法に従つてしか魔術を行使できないわけだから、それを変えることが出来るなら、誰だって自分の都合のいいように変えたいって思っちゃうでしょ？だから、ばれないように一緒に学生やんの」

「三年間？」

「あれ、気になるのそっち？まあ魔術の演習とかは、俺がアシストするし…、沙耶？」

多分、私は呆然としていたんだと思う。三年間、て。

「…冗談じゃないわよ」

せいぜい一ヶ月くらいで終わるんだと思っていた。

いや、法律の改正作業がもつと時間かかることは知ってるけど。でも、魔法を勉強して、それから改正作業するんでしょ？

それなのに、魔法を勉強するだけで、三年？そのころには私、きつと今まで勉強してきたことなんて、何にも残ってない気がする。

むしろ三年どころじゃなくて、一ヶ月勉強しなかっただけでも細かい知識なんて忘れそうなのに。

「あのさ、」

「引き受けてくれたよね？」

気がつけば、クノスが俯いてた私の顔を覗き込んでいて、その近さに驚いた。

「クノス、近い、」

「今更、やらないなんて言わないでしょ？」

どうして、私の考えていたことが分かるんだ。浮かべる笑みは、『脅迫』の二文字をまとうている。

でも、脅されたところで困るものは困る。

「だって、そもその法律知識を忘れちゃうよ…」

「…そうなの？」

「すぐに改正作業に入って、細かい魔法知識が必要なところは他の人に任せるんだと思ってたの。まさか、私一人じゃないんでしょ？」

「そりゃ、沙耶一人じゃないけどさ。最後まで協力はしてもらうことになる」

「そんなに長い間は無理」

だって、一体何年かかる作業なの、それ。絶対、無理。

かたくなに拒もうとする私に、クノスは困ったような泣きそうな顔をして、躊躇うように「じゃあ、」と口を開いた。

「じゃあ、…定期的に帰ればいい？」

「え？」

「定期的に、向こうに戻って、向こうで勉強できれば。法律知識忘れなくて済むんじゃない？」

「それはそうかもしれないけど、…でも、」

なんだか、妙な話になってきたぞ。

「それに、演習授業をパスにして、飛び級の形にして、一年半くらいで卒業できるようにするから」

「……」

一年半、か。向こうにも定期的に帰れる。

「ねえ、向こうのものをこっちに持つてくることは出来る？」

「出来るよ。言ってくれば、俺がやるし」

すると、こっちで勉強することは可能なんだ。こっちにいるときは、向こうの時間はほぼ止まっているし…。

「向こうにいる間、こっちの時間は止まるの？」

「いや、沙耶の身体に負担がかかりすぎるから、それはしない。だから、向こうに帰れるの一週間くらいだと思って。だから…、こっちで二、三週間いて、向こうに一週間、位のサイクルかな」

「ふーん…」

すると、一年半って言っても、実質こっちで過ごす時間はそこまで長くないのか、な？

あ、もうひとつ大事なことを忘れてた。

「あのさ、私の老化現象はどうなるの？」

「は？」

いやだって、この年で成長とはいえないでしょう。

「向こうの時間で考えるとね、向こうで一ヶ月経過するのに対して私は四ヶ月ぶん過ごしていることになるでしょう？」

一年半、や二年くらいじゃ大して変わらないから、気にしないでい

いのかなあ。

「…沙耶なら大丈夫だよ、きっと」

目を泳がせながら言われても、説得力ないですよクノス君。

「対策、ないわけね」

じとり、と睨んでやれば、クノスは慌てたように口を開いた。まあ、本気で怒ってないけど。

「あまり時間に関する魔術は、使わない方がいいんだ。本来あるべき姿じゃないから」

「あるべき姿？」

「うーん、それはちよつと秘密。それより、定期的に帰ることで、沙耶は改正作業手伝ってくれるんだよね？」

「え、ああ、うん」

まあ、勉強時間が増えたことで。やってみようじゃないですか。何か誤魔化されたような気がしたけど、クノスが自信なさそうに確認してくるから、とりあえず頷く。

するとクノスはぱあっと顔を輝かせて、「良かった」と嬉しそうに言い。

その笑顔は、いかにも年相応で可愛かったことは、クノスには秘密だ（絶対調子にのるから）。

そんな感じで丸め込まれて（？）、魔法学校に入学することになったんだけど、問題は年齢だった。さすがに、23歳ではまずいらしい。

校長先生とクノスは16歳でいいといったけど、流石に七歳もさばをよむ気になれなかったから、18歳ってことにしてもらった。ちよつと魔術の発現が遅くて、気がつくのが遅れたという設定らしい。

まあ18歳でも、五歳もさばをよむことになるんだけどね。

抵抗を覚えたのは、制服。ブレザーだっただけ、ましなのかな。それでも、この年で高校の制服を着るのは恥ずかしいよなあ…。

クローゼットにかかっている制服を手にとりながら、私はもう一度深く溜息をついた。

今は、自分の寮の部屋。

最初は、この世界も魔法というものも理解できずに、あたふたしていたけど、三日もたつと、それなりに落ち着いてくる。

すると、自分の身の回りのことが気になったりして。

目下、気になつてるのは、来週から始まる学校だ。それは、あと四日後に控えている。

四日後には、この制服を着て。第二の高校生活が始まるのかあ…。

大学まで出てしまっている身としては、朝から昼過ぎまでずっと授業があつて、クラスのメンバーも教室も変わらない、という形態が懐かしくもあり、少し退屈そうでもある。

でも、内容は全然違うんだから、面白いのかな。

本棚の中には、渡された教科書。「魔法総論」「魔法薬学」「呪文集」「言霊と精霊」…。

本当に、魔法学校に行くんだと思うと、楽しみのような怖いようなとりあえず、一ヶ月ほどこっちににいるから、とりあえず魔法について専念しようかな。

こっちに持つてくる教科書とか問題集も、向こうに一度戻らないと決めようがないし。

手にしていた制服を綺麗にクローゼットにしまつて、ガラス戸の向こうのベランダに出てみた。

外には、森が広がっていて、その果てはよく見えない。

学校と寮の周りには、深い森が広がっていて、勉強に集中できるように、外からは隔離されたような状態になっているんだそうだ。

森の向こうで、ゆっくりと太陽が沈んでいく。

その夕焼けは、向こうとちつとも変わらないのに。

「変なところ、来ちゃったなあ……」

春の風が、私の髪を柔らかく揺らしていく。

向こうは六月に入ったところだったのに、こっちはまだ四月だ。風は少し冷たくて、でも春のいい香りがした。

ひととおりの慌しさが落ち着いてしまえば、急に淋しくなって、落ち込んだ気分になる。

よく分からない世界に来てしまった不安。

頼れるのは、クノスだけで。おまけに、何か隠しているみたいだし。本当は23歳なのに、16歳の子と仲良くななんて出来るのかな。

高校生活なんて、魔法学校なんて大丈夫かな。

色んな不安が出てきて、どんどん気分が沈んでいく。

きつと。学校が始まってしまえば、それについていくのに必死になって、こんなふうには落ち込むことはないんだろうけど。

昨日、廊下ですれ違った校長先生の言葉を思い出す。

「魔法の改正作業についてはひとまず忘れて、学校生活を楽しんでください」と。

それはきつと、私が学校生活にかかりきりになることを見越していたんだろうな。

環境に慣れるまでは、他の事を気にしている余裕はきつとないから。

「頑張らなきゃ、ね」

まだ何も始まっていないのに、落ち込んでいても仕方がない。

よしつ、と気合をいれると、もたれこんでいたベランダの柵から身体を起こした。

部屋へと戻ると同時に、コンコンとノックの音がして、ドアを開けてやればクノスが姿を見せる。

「沙耶、夕飯行こう」

「うん、呼びに来てくれてありがとう」

期待と不安の混じる学校生活まで、あともう少し。

4、問題は山積みです（後書き）

まだ学校生活が始まりません…。

次回こそ！

今週は、毎日更新したいと思っています。

*アクセス、ありがとうございます！また読んでいただけると嬉しいです。

5、平穩はどこですか

ざあぁっと、風が鳴って、視界が一面ピンクになった。

こっちの世界と、向こうの世界の違いは、魔法があるかどうかで、

植生なんかは変わらないのだとクノスは言っていたけど、なんだかようやく実感した感じ。

桜自体は、たった二ヶ月ぶりですけどね。

なんでも入学式に間に合わせるために、私だけこっちと向こうで時間がずらしてあるみたい。

時間間隔がおかしくなりそうだけど、二重生活を始めたら、もっとだろっなぁ。

「魔法世界にも、桜ってあるんですね…」

「だねえ」

私の隣で、ほわほわとした可愛い女の子が、同じように桜を見上げながら呟く。

彼女は、小向^{こむかい} 陽菜ちゃん^{ひな}。寮の部屋の、私のお隣さんだ。

158センチの私からすると随分小柄な、華奢で小動物にみたいな女の子。ふわふわのこげ茶の髪が可愛い。

陽菜ちゃんと出会ったのは、昨日。

彼女は昨日来たのだそうで、わざわざ挨拶にきてくれたのだ。

なんでも、昨日の時点で寮にいたのは、ごく少数だったから、今のうちに友達になりたかったんだって。…ごめんね、こんなおばちゃん。

陽菜ちゃんによると、大抵は入学式である今日、この魔法世界に来るらしい。

入学式のあとに、入寮式があつて、そこから寮に入るのが正式。

ただ人数の都合で、向こうの現実世界とこちらの魔法世界をつなぐ列車——某作品を彷彿とさせるけど——の本数が足りないから、

前日に来る人が、少数ながらいただって。

…私、一週間前からここにいたんだけど。
道理でなんだか閑散としてたんだなあ。

「沙耶さん、あの…。彼のこと、知ってますか？」

「ん？」

桜を見上げながらぼんやりしていると、陽菜ちゃんから声をかけられて。

言われるままに指さすほうを見れば、クノスがいた。

少し遠くから見てるから良く分かるけど、彼はざわめく新入生達の中で、ひどく浮いていた。

——あまりにも、綺麗で。

きつと、男の子を表す言葉としては、適切じゃないんだろうね。
でも、クノスが桜吹雪の中を立っている姿は、一枚の絵みたい綺麗だった。

金に近い、茶色の髪。透明感のある白い肌。瞳は琥珀色。
さらさらの髪は、短くも長くもなく、風に流されている。

百人いれば、百人全員が振り向くであろう、薄幸の美少年。

「かつこいい、ですね…」

そう呟くように言う陽菜ちゃんを見て、今更のことに気づく。

…そうか、クノスって同世代の女の子から見れば、かつこいいんだ。
そう思っ、クノスの周りを見れば、私たちと同じように、
クノスを遠巻きに見て、頬を染めている女の子がいっぱいた。

あー、これはなんていうか。面倒なことになりそうな感じ？

これは、クノスに後で言っておかないとな、なんて思った瞬間に、
その画策が意味を失ったことを知った。

「沙耶！」

私の存在に気づいたのか、満面の笑みでこっちに走ってくるクノス。
……。

クノスよ、もう少し周囲の状況に気づいてくれないかな。

案の定、女の子達の視線は私に向いて。

別に睨まれているわけじゃないけど、その視線の集中に、少々恐怖を覚える。

うん、陽菜ちゃんまで、そんな驚いた顔しないで。驚くのは、分かるけど。

「沙耶、おはよ。迎えに行けるかと思ってたから、約束し損ねちゃって。失敗した」

「う、うん…」

近くまで来て、にこにこ笑っているクノスは確かに可愛いんだけど。

今の私は、それどころじゃない。冷や汗が、下ろしたてのブラウスの下を流れていく。

「あの、沙耶さん…」

「あ、陽菜ちゃん、あのね、こちら、クノ…黒須くんっていつて」

陽菜ちゃんに声をかけられて、はっと我にかえる。現実逃避してる場合じゃなかったんだった。

あわてて、陽菜ちゃんにクノスを紹介すれば、クノスは彼女のほうにようやく視線を向けた。

「沙耶、彼女は？」

「小向陽菜ちゃん。私の寮の部屋のお隣さんなの」

「へえ。はじめまして、黒須悠斗です」

「はじめまして！えと、小向陽菜です」

そうして二人で会話を始めたところで、私は詰めていた息を吐いた。陽菜ちゃんを見れば、頬をピンクに染めて、恥ずかしそうにしながらも、一生懸命に喋っている。対するクノスが、いかにも作ってまっすっていう笑顔なのが、ヒヤヒヤするけど。

さっきまでと笑い方が違いますよー。

そんなふう二人を見守っていると、袖を引かれて、後ろから声をかけられた。

何かと思えば、今のやり取りを見ていて、私に声をかければ、クノスと話せると思ったらしい。

…私は、クノスの橋渡し役か？

別にいいけど、ね。私を巻き込まないでくれるなら。それでも、次第に人に囲まれていくクノスを見て、少し淋しい気持ちになったのは、事実…みたい。

「沙耶、ひどくない？俺のこと、ずっと放置してさ」
入学式を終え、入寮式を終えて。

お昼を陽菜ちゃんや他の同じクラス女の子達と食べてから、寮の自分の部屋に戻る途中で、
クノスに声をかけられた。

「クノ…黒須くん」

「悠斗でいいのに。間違わないためにも、悠斗って呼んでよ」

「私は出来るなら、新宮さんと呼ばれたいな、黒須くん」

「何でいきなりそんな他人行儀になるわけ？ ていうか、話ずらさないでよ、なんで今日一日俺のこと無視してるの」

話をずらしたのは、キミでしょうと思いつつも、それは口に出さない。

なぜかって？私は、平穏な生活を好むからですよ。これも口に出せませんね。

「黒須くんのはことは、頼りにしてるよ？でも、友達とか作るなら、黒須くんばかりに頼ってたらダメだと思って」

そして、ダメ押しな感じでニッコリ。

「…嘘つき」

あ、やっぱりバレたか。

「別に、沙耶がそーいうつもりなら、俺は別にいいけど。俺がいないと困ると思うよ、沙耶」

そういじけたように言ってから、クノスは最後にこそつと耳元で付け足した。「俺がいないと、魔術使えないよ？」なんて。

それは、そうなんですけどね。

クノスのアシストによって、とりあえず直近の魔術演習課題はこなすらしいから。

もう少ししたら、免除になるようにしてくれるらしいけど。

「どうするの？」とか、ニヤニヤしながら言わないでくれる？このいじめっ子め。

「…分かった。なるべく避けないようにするから」

「なるべくって何！っていうか、今日は避けてたんだ！？」

今更だな、こいつ。

それにしても、どうしようか。

今日が入学式なのに、昨日今日出会って、こんなに仲がいいっておかしいよね。

…あ、そっか。

「ね、従姉弟ってことでいい？」

周りに人がいないことを確認してから、クノスにだけ聞こえるように、こそつと言う。

こんな打ち合わせ、聞こえてたら大変だ。

「え？」

「だから、私と黒須くん」

どうしたの、クノス？そんなにビックリすることかな。

「…なん、で？」

「だって、どう考えても、これで初対面っておかしいでしょう」

それに親戚とかの方が、やっかみ少なそうだし。

「あー、そっか。なるほど」

「でしょう？今度から、関係聞かれたら、そう答えてね。…っていうか、誰かにまだ聞かれてないよね！？」

別の答えをしてたなら、こんな打ち合わせ無意味だ。

「大丈夫、聞かれたけど「秘密の関係」って言ってるから」

「…あんまり大丈夫じゃないかも」

どうして、私達の間にいかにも何かあります、みたいな答え方する

かな！

部屋に戻ったら、絶対質問の嵐だよ！！

だけど、この後の事態に恐れおののく私に、クノスはのほほんとしている。

「ねー、この後何にもないし、お茶しに行こうー」

「……なんで、そう、」

「大丈夫、校長室の応接間だから」

私が言いたいことが分かったのか、私の台詞を遮って、クノスは楽しそうにそう言った。

……校長室の応接間でお茶するのも、どうかと思うけどね。

まあ人目はないから、周囲の人間の視線を気にしなくてもいいし、これからの具体的な話も出来るし。

なにより、この若さに混じって疲れた身体を癒せそうだ。

そんなに年をとったつもりはなかったけれど、

八歳も年下の子達のテンションについていくなんて、到底無理だった。

「ん、行く」

なんで、クノスは若く見えるのに。

一緒にいても、疲れないんだろう。不思議。

私の答えに、クノスは嬉しそうにして、「じゃあ、行こう」と、先に歩き始めた。

その日の夕飯と、その後の部屋に戻ってからのおしゃべりでは、やっぱり質問の嵐だった。

一応、私は18歳ってことで、年上だからか、そんな失礼な態度はとられないけれど、

その勢いには、やっぱり圧倒される。

うん、従姉弟設定作っておいて良かった。

夜になって、他の子が自分の部屋へと戻って。

最後まで片付けのために残っていた陽菜ちゃんが（会場、私の部屋だったんですよ）、

小さな声で、「沙耶さん、」と私を呼んだ。

「どうしたの、陽菜ちゃん？」

「あの、ごめんなさい……！」

泣く直前みたいに、目を潤ませて。まっすぐに陽菜ちゃんは、私に頭を下げた。

…なにごとですか。

「えっと、何か謝るようなことがあった？」

「その、私が黒須くんを紹介して欲しいみたいに言っちゃって、紹介してもらっちゃったから、その後の沙耶さんが、すごく大変になっちゃって、だから……」

ああ、この子は。ずっと、今日一日気にしてたんだ。

自分が興味を示したせいで、私とクノスが仲が良かったことが周りに知れ渡っちゃったんじゃないかって。

そんなことないのに。悪いのは、自分の人気に気づいてないクノスだ。

ついでに、クノスが同世代の女の子には、そういう対象になるって気づかなかった私と。

「大丈夫だよ」

そう言って、彼女のふわふわな髪を優しく撫でた。

「紹介したのは、私が仲良くなって欲しかったからだし、遅かれ早かれこうなっていたから」

そう、早いうちに手が打てて、むしろよかったかもしれない。

「だから、陽菜ちゃんが気にすることは、何もないんだよ」

そう言って、優しく笑えば、彼女はようやく顔をあげて笑顔を見せた。

あー、良かった。

泣かれるのは、やっぱり困るし。

涙を止めるのに、目をぐしぐしこすってる彼女は、小動物みたいで可愛いけどね。

「沙耶さん、ありがとう…」

「いえいえ、どういたしまして」

「でも、沙耶さんと黒須くんが従姉弟って、なるほどって感じですね」

「え？」

突然の台詞に、思わず素で驚いてしまう。

ごめん、その設定、嘘なんだけど。嘘って言えないけど。

「だって、お二人とも可愛い系の美人さんですもん」

「そう、かな…」

クノスが可愛いのも、美少年なのも分かるけど。

自分の評価としては、はてなが踊る。どちらかというと、「可愛い」って評価のほうが昔から多い。

ああでも年上だから、この年代から見ると、可愛いにはならないのかな。

「そうですよ！私、沙耶さんと仲良くなれて、良かったです。同じクラスだし！」

「そうだね、私も嬉しいな」

陽菜ちゃんみたいな、妹みたいに慕ってくれる可愛い子と仲良くなれて。

どうしたって、話の合う同世代の人間はいないから。

妹みたいな子のほうが、一緒にいて楽しい。

それにしても、クノスといい、陽菜ちゃんといい。

一度に兄弟が増えた感じがする。

「明日のオリエンテーションで、何するんでしょうねー」

「なんだろうねー、楽しみだね」

ニコニコ笑う陽菜ちゃんを見ながら、平穩のない学校生活も、何とかなるかと思ってしまった…のは、まだ少し早かったかもしれない。

5、平穩はどこですか（後書き）

お気に入り登録、ありがとうございます！
文才がなく、なかなか話が進みませんが、また読みに来てくださると嬉しいです。

6、クラスでの立ち位置は大事です

入学式が終わり、オリエンテーションが終わって。

気づけば、学校が始まってから一週間が経とうとしていた。

なんとか授業の形式にも、内容にも慣れてきたころ。

本日、最後の授業は、「魔法総論」だ。

ようは、魔術を使うに当たっての、一般的な決まりごとを学ぶわけ。
「魔術を使用するには、多くの決まりごとを守らなければならない。
守らなければ、そもそも魔術が使用できなかったり、上手くコントロールできなかつたりする」

そう前置きした上で、先生は黒板に『禁忌三ヶ条』と書いた。

魔術を知らない者に、魔術を見せないこと。

魔術を知らない者に、魔術を使用しないこと。

魔法世界の外で魔術を使用しないこと。

それが、前にクノスの言っていた、魔術を信用してないと、死ぬか大怪我するって話なのかな、と思ったり。

本当に、禁忌を破れば死んでしまうらしい。…10年ほど前にあった事件らしいけど。

禁忌を破れば、それは何らかのお咎めは受けるだろうけど、

なんの手続もなしに、いきなり死んでしまうなんて、どうなんだろう。

『法律』としては、なしだ。

だって、これって、決まりを破ったら、問答無用で処罰ってこと。

確かに現実世界で魔法を使ったら大変だから、禁止するのは分かるけどね。

どうして使用したのか、その事情も考慮しないで、一律に処罰っていうのはいただけない。

だって、嫌いな人を殺すために使うのと、大事な人を守るために使

うのと、同じ処罰って変じゃない？

どうせなら、そこら辺改正しちゃうかなー、なんて、実際出来るかはわからないけど、思ってみたりする。

本当に、魔法の改正作業なんて、私に出来るんだろうか。

先生の話が雑談に移ったのをいいことに、私はぼんやり窓の外を眺めた。

座席はわりとよくて、窓際、前から三番目。

流れる雲も、空の青さも何も違わなくて、黒板の内容さえ見なければ、

まるで高校時代にタイムスリップしたような気がした。

「そろそろ、板書は済んだかー。次いくぞー」

先生はそう言って、雑談を終えて、黒板を消し始める。

板書のための時間をとってたのか、とそこでようやく気づいた。

自慢じゃないけど、私は字を書くのが早い。

板書の写しは先生と同じスピードで書くし、そもそも話している内容をメモにとれば、実はあまり板書を写す必要はなかったりする。

そのとき、「あ、」と小さく漏れてしまったような声が聞こえて、隣を見れば、

お隣の高橋くんが、シャーペンを持ったまま、黒板を困ったように見つめていた。

どうも板書を書き逃してしまっただけらしい。

その困ったような顔に、ついおせっかいを焼きたくなくなってしまふのは、何でだろう。

なんか、これだけ年下ばかりいると、面倒を見なきゃいけない気分になっちゃうんだよね。

大きなお世話なんだろうけど。

とんとんと腕を軽く叩いて、「後で、ノート貸そうか？」とこっそり言えば、彼は驚いた顔のまま「ありがとうございます」と言った。

そして、放課後。

私は、困っていた高橋くんには板書部分を見せてあげるだけのつもりだったんですが。

……なに、この人ばかり。

「新宮さんて、天才ですね！ノートめっちゃきれいじゃないっすか！」

「え、俺も借りてもいいですか？」

「字も綺麗なんですね」

等々。ノートひとつで、そこまで盛り上げられる君たちがすごい。

高橋くんに貸したノートを囲んで、クラスの男の子達が数人盛り上がっていた。

出来れば借りないで欲しいし、書くのが早い分、絶対字は綺麗じゃないぞ。

「沙耶、どうしたの、この騒ぎ」

「ん、お隣の高橋くんにはノート貸してあげたら、こうなった」

そう言っただけに、クノスはあからさまに嫌そうな顔をして、「誰にでも親切にすることないよ」と恐ろしい声で呟いた。こちら、イメージ崩れるぞー。

「あのさ、高橋くん。写さないなら、ノート返してくれる？俺と沙耶、もう帰るんだよね」

「え、あ、黒須……」

そして、高橋くんを最強スマイルで脅迫してます。高橋くんが可哀相です。

「あ、いいよ。ノート使わないから、月曜に返してくれば」

「新宮さん」「沙耶！」

「ほら、もう帰るんでしょ。帰ろ、黒須」

この騒ぎが収まるのを待つよりも、ノート回収を後日にした方がいい。

これ以上、クノス暴走させたくないし。どうしてクラスメイトに喧嘩売るかなあ。

帰り支度をして、クノスを連れて行こうとすれば、そこで袖を引っ

張られた。

「高橋くん…？」

「あ、の、ノートのお礼に、その、」

高橋くんは、顔を真っ赤にして、しどろもどろだ。…年上に声かけるのって、そんなに恥ずかしいかね？

「いいよ、気にしないで。また月曜…」

「でもほらせつかくクラスメイトでお隣さんなので！月曜学食で一緒にご飯食べませんか驕ります！！」

…ほら、一気に喋るから、息が上がってるじゃん。

でも、そこまで気を使ってもらって、受けないのも悪いかな。

「なら、月曜のお昼は一緒に食べようか」

交友関係は広い方が、それなりの距離を保てそうでいいし。…って。」「俺も一緒でお願いします！」「」

さつきまで高橋くんと一緒に盛り上がっていた彼らも来るらしい。

おまけに、クノスまで「俺も行くから」なんて。

クノスが学食来たら、また騒がしいことになる気がするんだけどない。自覚ないのかな。

…まあ、月曜のことは、月曜に考えよう。

「沙耶さんて、やっぱり頭いいんですね」

その日の夜。

部屋の前でバツタリあった陽菜ちゃんに言われて、首をかしげた。

私、何かしましたっけ？

「ほら、今日ノート貸したでしょう？」

「貸したけど…」

「あのノート、今日クラス中に回ってたんですよ」

「…は？」

あの汚いノートが？なんで？

「なんか、授業以外のこともいっぱいメモがしてあるって…」

「あー、わかったかも…」

多分、予習してあった部分のことだろうな。

暇だったし、教科書が面白かったから、予習しといたんだ。

予習するのは、もはや習い性。高校のときは、あんまりやってなかったんだけどね。

「先生の話よりも分かりやすそうってことで、今日の放課後盛り上がってたんですよ？」

今度勉強教えてください、とニコニコと楽しそうな顔で言われて、私は何か失敗したことを悟った。

八年も長く学生をやっていたら、勉強のコツくらい知ってる。

だけど、これ以上、目立つつもりなかったのに…。

ただでさえ、年上ってことで浮いてるのに、さらにクノスっていう目立つしかない人物がすぐ傍にいて。

それに加えて、頭のいい人、ですか。…皆、すぐ忘れちゃうことを期待しよう。

「この前の魔法演習もすごかったし、…沙耶さんてすごい人ですよ
ね」

「…あはは」

そこまで言われちゃうと、もう乾いた笑いしか出ない。

この前の魔法演習とは、「呪文演習」の授業の話。

もちろん私は、実際は魔術を使えないんだけど、授業の前に、クノスから魔力を分けてもらっていた。

あ、魔力って、魔術で使うのエネルギーのことね。

自然界に存在する魔力を、探し出して、集めて、魔術として使えるように固めて、それでその魔力をイメージした形で放出することで、魔術っていうのは使えるんだって。

クノスから渡された魔力、イメージとしては、直径が3センチくらいの光の球。

この魔力の固まりー（？）を自分の思うとおりに使うのは、最初難しくて。

クノスに言われたとおりに、手の平で包むように持てば、それはほんのりと温かくて、そのまま手の中に吸収される。

だけど、手の平はまだ温かくて、実際にエネルギーが手の平に移った状態なんだって。

クノスは、それを対象物に向けて、やりたいようにイメージしながらぶつければいい、と簡単に言った。

けど、それが簡単に出来れば苦労はしないの！

というわけで、魔術の使用能力が高く、演習は必要ないと思ってもらえるように、初回の「呪文演習」の時間まで、結構練習したんだ。そのおかげで、初回の風魔法による物体移動は、結構上手くいったと思うんだけど。

先生は、対象物であるブロックを、壊さないで数センチ動かせればいいといった。

だけど、そこを私は移動させて浮かせて、少し離れた先生のところまで移動させてみたのだ。

こんなことが出来るのは、そもそも私が見える形で魔力を持っているからなんだけどね。

イメージすることも難しいけど、その魔術が見える分だけの魔力を準備する方が大変らしい。特に最初は。

先生は、自分の手の平に落ちてきたブロックを見て、すごくビックリしていたけど、

クノスが同じことをやったから、私とクノスを信じられないような目で見ていた。

まあ、不正がばれなくてよかったです。んでもって、まだ免除にはならないみたいです。

そのあと、魔力の集め方だの、固め方だの聞かれましたが、

「うまく言葉に出来ないんだよね」でそのときは、うまく全部逃げました。

逃げたはずなんだけど。

「あ、他の子が、魔力の集め方を見せてほしいって言ってましたよー」

…なんて。陽菜ちゃん、その伝言は聞かなかったことにするね。

実技も座学も出来る人、とか。

クラスでの立ち位置を、ちょっと間違っただかもしれないと思わなくない。

むしろ、間違ってる…！

「沙耶、俺よりクラスで目立っているって、気づいてる？」なんて、
よりもよってクノスに言われて、ちょっと挫けそうです。

6、クラスでの立ち位置は大事です（後書き）

今回は少し短めです。話がなかなか進まない上に、うまくまとまりませんでした…。

お気に入り登録と評価、ありがとうございます！

次回こそ、主要キャラをもう一人登場させる予定です。

7、図書室ではお静かに（前書き）

軽くR15です。

7、図書室ではお静かに

しとしとと雨が降っている。

そういえば、この世界に来てから初めての雨だ。

雨は優しく木々を濡らし、土ぼこりのひどかったグラウンドを湿らせていた。

そんな天気のせいだったのか、初めて訪れた図書室はひどく静かで、昼間なのにどこか薄暗かった。

カウンターがあつて、自習用のテーブルが並んでいて。

そこかしこに、リラックスして本が読めるようになのか、ソファが点在している。

本棚はその奥。ずらっと並んだ背の高い本棚の奥は、さらに薄暗くて、

どこか別の世界に迷い込んでしまいそうだった。

…ここも、別世界ですけどね。

この第一図書室の隣には、禁忌書ばかりを扱う書庫もあるそうだけど、

そこにはとりあえず用事はない。

自習用テーブルの間を抜けて、その奥に広がる本棚の森に足を踏み入れた。

本が傷まないようになのか、窓にはカーテンがしっかり引かれていて、

電灯もところどころにしかない。

こんな環境じゃ、目が悪くなるよなあ、なんて思いながら、私は更に奥へと足を進める。

静かだった。

自習用テーブルにも、数えるほどの人しかいなかったけど、この本棚の森の中は、私以外誰もいない。

ここが広いから、そう感じるだけなのかもしれないけど。

でも多分、実際にあまり利用者がいないんだ。

特別教室ばかりが集まる特別棟の最上階、最奥。

こんな場所に図書室を作ったら、人が来ないのも分かる気がする。勉強させたくないのかな。

危ない本があるから、興味を持たせたくないってこと？

よく分からないけれど、でも人の少ない図書室というのは、私にとってはありがたいから、別にいいんだけどね。

基本的に私は、活字中毒者だ。

無人島に何を持っていきますか、って言われたら、きっとサバイバル道具だろうけど、

監禁されるのに何が欲しいですか、って言われたら、きっと本だ。

小説とか新書のたぐいが一番好きだけど、

別に新聞でも、エッセイでも、詩集でもいい。実用書の類は、文章がそのまま頭に入ってこないから、あんまり好きじゃないけど。

でも、読める文章なら、実用書でもいい。

それに、本当に読むものが無かったら、チラシでも取扱説明書でもいいから。

それくらいの、活字中毒者。

だから、昔から図書室が好きだった。

魔法学校に来て、なんで最初に確かめなかったのか自分を疑うけど、きつと、あまりに突然に環境が変わって、思い出せなかったんだと思う。

学校も二週間目に入って、少し落ち着いたから、今日ようやく来れたのだ。

人も少ないし、なんか避難場所になりそうだな。

最近、周囲に人が多くいるのが常だったから、こうして一人になると、ひどく落ち着く。

ゆっくりと本の背表紙を眺めて、何か小説の類はないかと探してみるけど、

どうも魔法関連の本しかなかった。

棚が違うのかな。

まあいいか、と一冊本を取り出して、パラパラとめくってみる。魔術の発想法、と題されたその本は、まだ魔術というものを良く分かってない私には、

意味の分からないところも多かったけど、それでも面白かった。

そんなふうに、本に夢中になっていたから。

後ろから近付いている人影に、私はちっとも気づかなかった。

とん、と目の前の本棚に手をつかれた。

その音にハッとして、本から目をあげると、背後に人の気配がしていた。

この手は、その人のものらしい。

一体、何事か。なんで、こんなに近付かれるまで気づかなかったんだ、私！

なんかすごく嫌な予感がする。

そして、そういうどうでもいい予感ばかり当たる。

ふう、と首筋に息をかけられた感覚がして。

それにゾクツとして、慌てて振り向いた。

なにするんだ、こいつ！

振り向けば、そこには結構の背の高い、男子生徒がひとり。

かろうじてシャツに引っかけられているネクタイの色からすれば、三年生だ。

そして。

その少年は、その整った顔を歪めて、意地悪そうに笑った。

「あなたの秘密、知ってる」

「ひ、みつ……？」

秘密、って何。

私其实是、魔術が使えないとか？魔法改正のために来ていて、実は高校生じゃないとか？

…ダメだ、思い当たるふしが多すぎる。

「秘密なんて、ないけど」

ここはしらばつくれるしかない！

動揺が表に出ないように、慎重に声を出す。何を隠そう、私は嘘が下手だ。

「へえ？秘密じゃないんだ？」

彼は、ひょいと器用に片方だけ眉を上げて、私を嘲笑うかのように笑う。

…どうでもいいけど。

この人、普通に笑ったら、きつとかっこいいんだろうに。

性格のせいで、顔まで歪んじゃってる、可哀相に。

そんなことを思っ

て。緊張しないように、虚勢を張れるように、自分を奮い立たせてたのに。

「あんた、高校生じゃねえだろ」

耳元で囁かれた言葉に、ビクッと身体の方が答えてしまっていた。高校生じゃない。年を誤魔化している。それは、ひどく私をみじめにする。

「やっぱりな」と、彼は面白そうに笑った。

まるで、いじめっ子がちょうどいい“玩具”を見つけたみたいに。

そしたらこの場合、“玩具”は私、だ。

その瞬間、身体が羞恥で熱くなつて、泣きそうになった。

何これ、何こいつ、あんた誰？

どうして私が。

こんなふうになんて扱われなきゃならないの。

「何の話だか、わかりません。どいてください」

私に覆いかぶさるようになつた身体を押しつけて、その場から立ち去ろうとした。

どうせ、ハッターだ。

本当に分かつてるわけない。

泣きそうな気持ちで、そう自分を慰めながら、

それでも、一刻も早くこの場から立ち去りたかった。
なのに。

…彼は、それを許してくれなかった。

「おい、逃がさねえよ」

腕を捕まえられて、引っ張られた。

どこへ行くかを聞く間もなく、本棚の並ぶ図書室の奥へと引っ張られていく。

「はなして…！」

「図書室では、静かにしないといけないんじゃないの」

「っ、」

それは正論だけど、それとこれとは話が違う！だいたい、アンタが言うな！

そう反論しようと思っても、長年ついた癖は抜けない。

声を出そうとするたびに、喉は私を裏切って、声を立ててくれなかった。

そうこうするうちに、図書室の最奥。

壁にそって並んだ本棚に、ぐいつと引っ張られた身体は押し付けられた。

背中に当たった棚が痛くて、思わず顔を睨みつけて、飛び出した文句。

「何す、るっ…！？」

恐ろしいことに。

次の瞬間、私は本棚に身体を縫い付けられて。

唇をふさがれていた。

一瞬、何が起こったか分からずに、
感覚は徐々に戻ってきた。

視覚。目の前に、あの憎たらしい顔があつて。

触覚。唇になにか柔らかいものがあたっている。

聴覚。ちゅ、と小さくリップ音が聞こえた。

もうそこまで取り戻せれば、充分。

「何するの……!!」

押し返した身体は、意外にもあつさり離れた。

唇を拭つても、さっきの感覚は消えてはくれない。

泣きそうだった。どうして、こんな嫌な目に遭うんだろう。

ここは、図書室で。私の大好きな場所のはずなのに。

私に押しのけられた彼は、そこから私に近付こうともせず、

俯いたままで、どんな表情をしているかも、何を考えているかも分からなかった。

でも、そんなのはどうでもいい。

慌てふためく私を嘲笑つていようと、拒否されて驚いていようと。とりあえず、こいつとこれ以上、係わり合いになりたくなかった。

それなのに。

「アンタ、新宮沙耶だろ」

「……！なんで知って……？」

彼は、私を知っていた。

「俺は、あんたを知ってる。今年24になるんじゃないの？」

顔を上げた彼は、淋しそうな、辛そうな顔をしていて。

どうして、貴方が傷ついたみたいな顔をするの？

「あんたは、知らないんだろうな、俺のこと」

知らない。知るわけない。

私に、こんな年下の知り合いはいない。

それが、悪いことのはずなのに。

泣き出しそうに顔を歪めて俯く彼に、なんだか悪いことをしたような気がして。

高ぶっていた感情が、しゅるしゅると萎んでいく。

……いや、悪いことされたのは、こっちなんだけど。

「貴方は、誰？」

気がつけば、尋ねていた。なんだか、そうしなきゃいけない気がしたから。

その瞬間、彼はパツと顔をあげて、驚いた顔をして。

「綾坂^{あやさか} 海斗^{かいと}。18歳」

呆然としたままの声で答える。

年までは聞いてないけど、まあいいや。彼も私の年齢、知ってるしね。

「ちょっと事情があつて、年を偽っていますが。黙っててほしいんだけど」

「…怒ってねえの？」

どうやら元々の私を知っているみたいなので、仕方ないから認めれば、

彼は的外れな答えを返す。

怒ってるけど、今それぶつけてどうすんの。

「怒ってるし、許してないけど。黙っててくれるなら、許してもいい」

別に初めてじゃないし。

事故みたいなもの、で片付けられなくはないから。

すると彼は、ぱあぁと顔を輝かせて、笑顔になった。

「黙ってる、誰にも言わねえ！」

「ちょ、声が大きい！」

しつ、と指を立てた私に、もう一度彼は笑顔になって。「変わってねえのな」と言った。

「ねえ、なんで知ってるの？」

「沙耶のこと？やっぱり覚えてないのか」

「会ったことある？」

「秘密」

後から聞けば、最初の態度はインパクトのある出会いなら、印象を

残せると思ったらしく。

第一印象が悪くなるだけでしょ、
たとえば、「それでも良かった」
という海斗に首をかしげた。

7、図書室ではお静かに（後書き）

更新、遅くなりました、すいません。

ようやく海斗を出せました（笑）

主要キャラはもう一人、もう少しすると出てきます。

8、魔術を学びましょう

放課後、寮の部屋。窓の外は、早くも夕方の気配。

昨日は雨だったけど、今日はいいい天気だったから、夕焼けがきつと綺麗だ。

「沙耶」

…そして。

目の前には、仁王立ちのクノス。視線を落とせば、呪文集と呪文学の教科書。

ここ女子寮なのに、クノスがいるの不思議だなー。

どうして机に向かいながら、私クノスのお説教受けてるんだろう。

「沙耶？」

めずらしくトーンの低い、クノスの声に観念した。

…そんなに、怒ってますって言わなくなつて、分かってるよ。

サボってた私が悪いんですー。

だって、呪文学って語学っぽくて苦手なんだもん。何を隠そう、高校時代に一番苦手だったのは英語だ。

だけど、こうして魔術の使えない私のために、補習みたいなことをしてくれているんだから、怒っちゃいけないんだろうな。

「ごめんなさい」

無然とした声で答えれば、呆れたような溜息が降りてきた。

私は今、自分の寮の部屋で、クノスから魔術について教わっていた。教わっていたというより、明日の演習でうまく誤魔化すための技術を習っていたというか。

「…明日だよ？」

冷ややかに降りてくる視線は、間に合うの？と言ってるけど。

「先週と一緒に、ダメなの？」

先週までに、結構頑張って練習したと思うんだけどな。

下から恐るおそるクノスの顔を覗き込めば、もう一度大きな溜息をつかれた。

「なにそれ無意識なわけ？」って何がですか？

コトの起こりはなんというか、先週の『呪文演習』の授業だったらしい。

クノスに言われたとおり、課題をこなしたつもりだったんですが。

「詠唱破棄するな、って言ったよね俺」

「エイシヨウハキ……？」

「呪文を唱えずに、魔術を使うこと。詠唱、破棄」

「ああ、詠唱破棄！……なんで？」

そもそも呪文がなくて、魔術が使えるなら、便利じゃないか。だってクノス、イメージで使えって。

「あのねえ、魔術に呪文は不可欠なの！先週の授業は、それを実体験するために、あえて呪文を使わないで魔術行使させたんだよ」

それに俺、イメージに合った呪文だけは忘れるなって言ったけど。

……そうだったけ？

「呪文を唱えたことにしといたけど。詠唱破棄っていうのは、よほど魔力の扱いに長けて、イメージの力の強い場合にしか出来ないって言われている。よっぽど使い慣れた魔術じゃないと、まず無理だっていう話」

「え、なんで、私出来たの？」

むしろ、そんなすごい技（？）がなんで私に使えたのか、謎なんです。

「……俺が、魔力あげたからでしょ」

「なるほど！……クノスも詠唱破棄してたよね」

「……してない」

嘘だー。目が泳いでるもん。

でも、クノスならそれでもありな気がしていた。だって、魔力を人に与えられるって、結構すごいことなんじゃないのかな？

「とりあえず！多分明日も風魔法だから、単純な風魔法の呪文くらい覚えて」

そう言つて、クノスはパラパラと呪文集を開く。

「暗記、嫌いー」

「沙耶？」

可愛い顔に、黒い笑顔で微笑まれて、私は仕方なく呪文集を手にとった。

魔術は、五つに分類される。

水魔法、火魔法、風魔法、土魔法、緑魔法。

水魔法は、すべての水の形態を操る。

水、水蒸気、氷。それから液体状のもの。水蒸気が操れるから、高度な魔術だと、雨を降らせることが出来るとか。

火魔法は、熱エネルギーと光エネルギーを操る。

炎だけでなく、熱と光を操るのは、火魔法に分類される。

風魔法は、風力を操る。

気圧を操ることなんかも出来るらしい。弱い風力で物体の移動が出来る。高度になると水魔法と風魔法で、天候も操れるのだとか。

土魔法は、重力を操る。

物を浮かび上がらせる魔術は、土魔法に分類されることが多い。風魔法も浮力と言う形で出来なくないが、基本は土魔法なんだそうだ。緑魔法は、生命に対して影響を与える。

生き返らせることは出来ないけど、怪我の治癒なんかが出来る。元々植物の成長促進をさせる魔術ということで緑魔法だったんだけど、生命体という分類では、植物も人間も一緒ってことみたい。

その五つに分類される魔術を、操るためには呪文が必要。

呪文を唱えることで、魔力を集め、形にして、放出することが出来る。

…クノスは、イメージだけで出来るって言ったんだけどな。

もちろんイメージがなければ、呪文を唱えても魔術は効果が出ないけど、呪文を唱えることでイメージが增強されて、魔術をきちんと使えるらしい。

呪文を唱える代わりに使うのが、魔方阵と魔道具。

魔方阵は、二重の円を書き、その円と円の間に呪文を書き込んで、中央に魔力を込める。時間差で魔術を発生させたいときに、魔方阵は役にたつらしい。

魔道具は、道具というよりアイテムに、呪文を彫りこんでおく。そこに魔力を込めると、その呪文を唱えなくとも、魔術の効果が発生する。呪文を唱えるのが難しい、二つ以上の魔法を使うときに便利なんだそうだ。

「ここまで、分かった？」

「んー、多分」

呪文集を見て顔をしかめた私を見、クノスは魔術の分類について説明してくれた。

単純に覚えるよりも、全体像を知ってから覚えた方が効率がいいと思ったんだろうな。確かにそうなんだけどね。

魔術の五つの分類。この魔術を分類して規定しているのが、『魔法』なんだそうだ。

だから、水魔法とか風魔法とか言うんだね。

魔法の種類によって出来ることは違うし、その魔法ごとに呪文は決まっている。

違う種類の魔法を混ぜて使うこともある（混合魔法というらしい）けど、それも呪文によって決まっているんだそうだ。

呪文によって、決まっている。……なんか引かかるんだけどな。けど。

「さて、と。ここまで来たら、呪文集開いてー」

「えー、もう少し話聞きたい！」

非情なクノスの台詞に、そんな引っかかりは霧散して。

「沙耶？」

「だって…」

「全部日本語なんだから、語学じゃないでしょ」

「古文もあんまり得意じゃなかったかな…」

なんで文系にいるんだって言われそうだね。

得意なのは、数学と社会でした。なんで歴史上の人物の名前は覚えられたのかなー。

「多分、これかな」

そう言ってクノスは勝手にパラパラと呪文集をめくって。

指さしたのは、風魔法の章の初めの部分だった。

「物体を動かす魔法は、そんなに難しくないから。浮かび上がらせるのは、少し高度になるから、ここら辺かな」

そう言ってもう少し先のほうへと指を動かしていく。

なるほど、と思いつつ、目は他の呪文を追っている。一体いくつくらいあるんだろう。

「この呪文集って、全部載ってるの？」

「呪文が？まさか。魔法学校でやる分だけだよ。まあ、得意魔法と不得意魔法ってのがあって、これ全部は、やらないけどね」

そう言って、クノスは呪文集の背表紙を撫でた。

そうだよ、辞書ほどの厚みはないけど、普通の本くらいの厚みはあるから、結構あると思うんだ。

そうして、はい、とクノスに本を渡されて。私が仕方なしに呪文を覚えはじめると。

隣から、じーっと音のしそうなクノスの視線。…すっごく痛いんです。

「クノス、何？」

呪文覚えろって言ったくせに。観察されてると気になって、集中できないよ。

「昨日さ、綾坂って奴に会ったって本当？」

顔を上げてクノスのほうを見れば、意外なほどクノスは深刻そうな顔をしていた。

なにか、まずいことでもあったのかな……？

「綾坂って、海斗？クノス、知ってるの？」

綾坂海斗は、昨日図書室で会った失礼なやつだ。失礼な上に、少し変わっているような。

傍観者の視点からすれば、折角あんなにかっこいいのに、もったいないって思うけど。

私の正体、というより、向こうの世界での私を知っているみたいだったから、何かまずいことをしたのかと心配になる。

…なのに。

「海斗？」

「…うん、綾坂くんの話じゃないの？」

「なんで俺が黒須なのに、そいつ海斗なんて呼んでるの？」

……。

おーい、何のヤキモチなの、それは。

「あの、さ。綾坂くんが、何かあったの？」

もう面倒だから、クノスの前で呼ぶのは控えよう。本人の前だと、海斗って呼ばないというさいから呼ぶけど。

…もう面倒くさい弟たちだ。

「何かっていうか、沙耶がまた変な男引っ掛けてきたって聞いたから」

「引っ掛けてきてないし、…やっぱり変な人なの？」

「やっぱりって何！？何かされたの!？」

「あー…」

これは、もしかして墓穴を掘ったかな。いいや、埋めちゃえ。

「ううん、ちょっと話ただけだけど、変わってるふうだったから」
ニコニコしてたら、とりあえず誤魔化されてくれないかな。

「本当に何にもされてない？」

「されてないよー」

ちよつとキスされたことくらい、なかったことにしてしまえ。

「なら、いいけど」

そう言つて、クノスは安心したような、拗ねたような複雑な表情で、視線を逸らした。

ううん、これは半信半疑かな。

一応私の保護者つてことで、クノスとしては色々心配なんだろう。嘘ついて悪いことしたかな、と思いつつ、なんとなく弟に心配されている姉みたいで、おかしかった。

窓から差し込み始めた夕焼けが、部屋を茜色に染めた午後のこと。

8、魔術を学びましょう（後書き）

* お気に入り登録と評価、ありがとうございます。

* 魔術の説明は、結構適当に作っているので、矛盾などがあるかもしれません。気づいたことがあれば、教えていただけると幸いです。

9、逃亡を希望します（前書き）

* ややR15です。

9、逃亡を希望します

姉さん、ピンチです。…違う、私に姉さんはいない。

先生、ピンチです。…ダメだ、目の前にいるの、一応先生だよ。

あ、わかった！

クノス、ピンチです！

魔法世界の私の保護者だよね、クノス！

そんなこと思ったことないでしょ、とクノスの突っ込みが聞こえる
気がするけど、今は無視だ！

助けて、クノス！

事の起こりは、十数分前。

魔法薬学の御堂先生^{みでう}に、授業後に薬品瓶や器具の片付けを頼まれて、
一緒に魔法薬学準備室へと赴いた。

御堂先生は、まだ若くて、26歳だとか。

誰から情報って、…陽菜ちゃんですよ。意外と情報通な妹です、ええ。

魔法薬の研究のせいらしいけど、先生の髪は綺麗な銀髪だ。目の色は、普通にこげ茶色だけど。

だけど、どうして魔法世界って美形が多いのかなー、っていう感じで、先生も綺麗な顔立ちをしてらっしゃいます。

クノスがかわいい、海斗がかっこいいなら、先生は綺麗。

無表情で淡々としてるから、彫刻みたいだ。

それでも目の保養だなあとか思いつつ、年が近いこともあって、普通に話をしていた。

ごくごく普通の世間話。

普通の話もできるんだなあなんて、失礼な感想を持ったことは秘密、で。

学校に慣れたかだとか、食堂のメニューがどうだ、だとか。

そんな中身のない話をしているうちに、魔法薬学準備室に着いた。

先に入った先生に続いて部屋へと入れば、そこは研究室をかねているらしく、よく分からない器具が山ほどあつて。

なんだか、魔術師の研究室みたい。…魔術師なのか。

乱雑した部屋で、先生は持っていた器具を入れるための木箱を適当なテーブルに置いていたけど、それ以外にあいているスペースが見つからなくて。

部屋を見渡しながら、一緒に運んできた薬品瓶の入った箱を、どこに置こうか訊こうとしたときだった。

ふっと、上から陰が差して。

何事かと思えば、先生がすぐ横に立っていた。

「御堂先生…？」

「なんですか、新宮さん」

すぐ横は壁、反対側は先生。

なんとなく先生を見上げる形になれば、背中に壁があたった。…ま
ずいかも。

「あの、ちょっと離れていただけませんか」

「どうして？」

どうして、って！今にも触れそうな近さに立っておいで、それはない
だろ！

それでも相手は先生だし、年上だし、この前の海斗相手みたいな態
度は取れない。

両手がふさがっている状態では、上から覆いかぶさられても、とっ
さに逃げ出せない。

…先生も身長あるよなあ。

ちよっとまずい状況なのに、上から覆いかぶさられて、一瞬思考が

ズレた。

クノスが175センチで、海斗が181センチって言うてたから、多分178センチくらい。

クノスと海斗のちょうど中間。

「新宮さん、」

声をかけられて、ハツとする。現実逃避してる場合じゃなかったんだった。

私の頭上の壁に、手を付かれて。上から降ってくる、声。

ゆっくりと近づけられる顔に、じんわりと恐怖が滲んでくる。

これは、なに。

何が、起こっているの？

「あんまり簡単に信用しない方がいいよ？」

ふう、と吐息がかかるほど、近く。

耳元で囁かれた声。

ビクリ、と微かに揺れてしまった自分の身体が恨めしい。

ああ、もう。この薬品瓶、床に落としていいかな。

「落とすなよ？」

考えを読まれたのか、反応してしまったからなのか。

かすかに笑いの混じった忠告は、ますます私を緊張の渦へと落とし込む。

もうちょつと男性経験を積んでおくべきだったか。そういう問題じゃないのか。

どうしよう、どうしよう。

どう切り抜けたらいいんだろう？

そうして、冒頭へ戻る。

でも、心の中でいくら呼んでも、クノスは来てくれなかった。…当たり前前か。

それでも、なんか特殊な魔法使いみたいなんだから、来てくれたら

いいのに！なんて、クノスに八つ当たりして。

そこで、ひとつ小さく深呼吸。

気持ちを落ち着けなきゃ。

思い切って、俯いていた顔をあげれば、思いのほか近いところに先生の顔があつて、慌ててもう一度俯くはめになった。

耳元で、笑いを堪えないでください！

ああ、せっかく気持ちを落ち着けたのに。

自分の頬が、赤くなっているのは分かる。だってさっきから、すごく熱い。

だからきつと。

先生だって、分かつてる。

「なに、が…、したいんですか…」

頑張つて出した声は、震えていた。

みつともない、とは思うけど、どうしようもない。

「何が、つて？」

授業中とは違う、微妙に熱を持ったトーンの声。

無表情で、彫刻みたいだと思った先生の顔は、私のすぐそばで、微かに、けど意地悪そうに、微笑んでいる。

「生徒困らせて、楽しい、ですか」

「生徒を困らせてるつもりはないけど？」

「え？」

その、一瞬だった。

思わず先生の方へと振り向いた瞬間に、唇に触れたもの。

…最近、こういうパターン多くない？

呆氣にとられる私に、視線を合わせたまま御堂先生はニッコリ笑った。

「新宮は、生徒じゃないだろ？」

先生は、一体何枚猫を被っているんでしょうか。

「…何の話ですか？」

18歳かって言われたら違うけど、生徒かって言われたら生徒です

よ。

だって、一応入学して、在学してるもん。
嘘をつかなくて済むことで、思いつきり不審そうな声を出せば、先生は意外そうな顔をした。

この人、表情筋けっこう動くんじゃない…。

「魔術使えなくて、魔法学校の生徒？」

「！」

それがバレてるとは。

え、なんで？クノスと練習してるところ見られた？

それとも、先生だから、校長から話がいつてるとか？

どう誤魔化せばいいか分からなくて、とりあえず否定しか出来ない。

「い、言いがかりです」

「最初に驚いた時点で、アウトだね」

そう言いながら、御堂先生はニヤニヤ笑っている。

人のこと苛めて楽しいのか、このヤロウ。

「先生が、変なことを言うから驚いただけです」

「へえ？」

心底信じてません、って声。

海斗も嫌な感じだったけど、それ以上だな…。

なんだろう、変な人に絡まれる月間なのかな。

「本当のこと、吐かせてやろうか」

突然、また耳元で声がする。

さっきまで人の顔、覗き込んでたくせに。

「本当もなにも、…んっ」

反論しようとしたところで、思わず口を閉じた。

だって、変な声が出そうだったから。

突然、耳に、ざらりとした生暖かい感触。

「せんせ、何を…っ」

ゆっくりと下から上へとなぞられて、身体がピクツと反応してしま
う。

「ん、やつ、」

「お前、感度いいな」

そんなのどうでもいいから！

耳元で、吐息交じりに喋るな！

ていうか、人の耳を食^はむな！

必死にその感触に耐えていたから、いつ身体に腕が回されたのかも
気付かなかった。

薬品瓶の箱ごと、先生の腕に囲われていて。

いつの間にか先生の舌は、耳から首筋へと移っている。

「せんせ、やめ、てつ、」

「…本当のこと、言う気になっただろ？」

ようやく舌を私の肌から離れた彼は、楽しそうに笑っている。
なるか、バカ！

精一杯、恨みをこめて睨めば、「正直に言わないなら、続きする
けど？」なんて脅された。

「何が、目的ですか」

どうしてだろう。

この前から、なんでこんなに窮地に陥ってばかりいるんだ。

…クノスに叱られそう。

なのに。彼は。

「んー？何も？校長からじきじきにフォロー頼まれてるだけだし」

……。

…は？

「はい？」

「先生側にも、事情を知っている人間が一人くらいいた方がいいで
しょ」

年が近いから、って理由で頼まれたんだよねー、と御堂先生は、楽
しそうに言う。

えっと、えっと。

話についていけないんですけど。

「…今のは？」

「何が」

「今の、嫌がらせの理由は？」

「あー、新宮にちよっかいかけてみたくなったから？」

「いいません」

そんな理由で、人を脅すな！

いまだに感触が残る耳もとを、手でごしごしと擦れば、「傷つくな
ー」なんて、まったく傷ついてない声がする。

なんなの！もう、本当に一体なんなの！

余りの展開に、私が声もなくしている間も、御堂先生はフォローすることなく、「久しぶりに笑ったなー」とか言いながら、表情筋をほぐしている。

もう少し、普通に笑ったらいいのに。

そして、「はい、ありがとう」とようやく、抱えていた薬品瓶の箱を受け取ってもらって、

私は即刻、魔法薬学準備室を出た。

「また困ったことがあったら、おいでー」

「もう二度と来ません！」

そんな捨て台詞を残しながら、なんだかもう一度ここに来るような気がして、慌ててその考えを振り払った。

それを見ていた人影に、私は気付きもしなかった。

9、逃亡を希望します（後書き）

ようやく御堂先生を出せました！。

これで、主要キャラは全部出したはず…。

今回は、現代に一度戻る予定です。

今後の更新ですが、隔日でも難しそうで、週1くらいになりそうです…。

なるべく更新していきたくてますので、また読んでいただければ嬉しいです。

お気に入り登録してくださった方、評価を下さった方、ありがとうございます！

10、お家へ帰ろう

忙しい毎日の中で、いつのまにか学校が始まってから三週間が経っていた。

すわなち、こっちに來てから一ヶ月。

それはつまり、法律の勉強から離れて一ヶ月ってことだ。

「クノス、約束だったよね？」

確かに、魔法学校は楽しい。

クノスに怒られたり（ちよつと姑みたいだ）、

海斗に絡まれたり（三年生が一年生の教室に來るんじゃない！）、御堂先生にニツコリ用事を頼まれたり（回避するのが大変です）。

そんなアクシデントはあれど、クラスの子たちとも、そこそこ仲良しだし、魔法は面白いし。

最初に考えていたよりずっと、私がこの生活を楽しんでいるのは事実だ。

だけど。

だけどね？

「家に帰して」

家に、元の世界に。

もとの、生活に。戻りたい。戻らなきゃ。——ここは、私の居場所じゃないから。

クノスは一瞬驚いた顔をしてから、顔色を曇らせて、深く溜息をついた。

「やっぱり、戻りたいの？」

「やっぱりって何？最初に約束したじゃない」

「そのわりには、こっちの生活楽しそうだよなあって思っ」

何よ、その目は。

確かにこっちの生活は、思っていたよりずっと楽しいよ？

だからって、向こうの生活をおざなりにしていいわけじゃない。

…実を、言えば。

少し怖いのだ。

こんなにも、毎日が楽しくて。

向こうの、元の世界に。もとの生活に。戻れるのかつて。

「沙耶？」

「…忘れちゃうから、法律」

私が暗い顔をしたからか、クノスは疑わしそうなジト目をやめて、心配そうに私の顔を覗き込んだ。

うん、忘れそうなの。

今までなら暗唱できるくらいに何度も使っていた条文が、とっさに出てこないなんて。

やっぱり、シヨックだよ。

「家に帰してください」

暗い顔のまま、ペコリと私が頭を下げれば、

クノスは少し悲しそうな顔で、「わかった」と頷いた。

久しぶりの我が家。

向こうの世界に行ってから、こっちの世界は二時間ほどしか経過してないから、まだ真夜中で。

一ヶ月前、こっちを離れた状態から動いているわけがなく、

お茶をいれたコップも、クノスが出てきた六法も、そのまま。

長い旅行から帰ってきた感覚なのに。出かけたままの状態なんて、ひどく奇妙だ。

何か、長いながい夢を見ていたような感覚だった。

…それ、さえないければ。

「沙耶ー、なんで俺、『それ』扱いに戻ってんの？」

「むしろ私が、なんでクノスがここにいてるかっで聞きたい」

それも、精霊の姿で！

「俺がいないと、沙耶向こうの世界に戻れないじゃん」

「また戻るときに、来ればいいでしょ」

「後はまあ、お目付け役というか」

「…私は、何をやらかすと思われてるわけ？」

お目付け役って。

こっちで生活する分には、私に何の支障もないし、むしろこっちにいる間くらいは、向こうの世界のこと忘れていたいんだけど。

「こっちにいる間に、魔法学校のことが夢だとか思われたら困るから」

「……」

なんか、色々読まれている気がして悲しい。

俺の存在があれば、夢とか思えないでしょとか、確かにそうなんですけどね。

うっかり、殺虫剤とかかけないようにしないとー。

「現実だからね、沙耶」

「はいはい、分かりましたよー」

ニツコリ、クノスの最強の笑みが出て。私はあっさり抵抗をやめる。まあ一週間だし。久しぶりの一人暮らしだから、誰かいた方が実はいいともいえるし。

そんなこんなで、私とクノスの現代生活は始まった。

一ヶ月ぶりの学校は、ひどくくたびれるものだった。

よくこなせていたなあ、と我ながら感心してしまう。

授業と予習、ゼミとその準備。

一日8時間ではこなせずに、他の時間を削って勉強するしかなくてけれど、睡眠時間は削れなかった。

家に帰ったらベッドに直行。随分と怠けてたんだなあなんて、実感してしまう。

一日終わったらくたびれて、ひどく眠い。

「ちよつと、沙耶！今日も寝ちやうの！？」

クノスの少し高い声が、私の狭い部屋に響く。

ベッドに倒れこんだ私に、クノスは頭上をふよふよと飛びながら、私の髪を引っ張る。

戻ってから翌日、学校一日目から、私は毎日こんなだった。
今日はまだ三日目。

ようやく明日は、学校はお休みだけど、自習しに行かないと予習が間に合わない。

「クノス、うるさい…。目覚ましかけといてね」

「え、夕飯はどうすんの」

「休憩のときに、おにぎり食べた…」

「ええー…、俺と一緒に食べるって言ったくせに…」

しゅんとしたクノスの声が聞こえる。

クノスに悪いことをしているのは分かっていた。

けど、いかんせん瞼が重くて、開けてもらえない。

約束破って、ごめんねクノス。

一緒に夕飯食べるつもりで、軽食のつもりで、おにぎり一個だけに
しといたんだよ。

けど、もう。食べるより、眠りたい。

そこら辺にあるもの、好きに食べていいからね。

そう、頑張って言葉にして。…クノスには、むにゃむにゃにしか聞
こえなかったそうだけど。

「沙耶…、学校楽しい？」

「…ん、」

耳元で、またクノスの声が聞こえた。

学校？楽しいかって？…おかしいよね、楽しくないの。

久しぶりにこっちの友達に会って。絶対に、向こうよりも話が通じ
るはずなのに。

全然、話が弾まなくて。つまらなかった。

そんな会話を楽しむ余裕が、今の私にはないせいかもしれないけど。勉強だってね、前はもう少し楽しむ余裕があったんだよ。今は、目の前の課題をこなすので精一杯。

…向こうの世界に、戻りたいな。

眠りに落ちる前に、私の頭にはふとそんなことがよぎって。

一ヶ月目にして、私はすでに自分の立ち位置を見失いつつあった。

そんな私の立場を、さらに悪化させてくれる出来事は、もうすぐ。

10、お家へ帰ろう（後書き）

なかなか話が進みません。

もう少し更新頻度をあげるつもりなので、これからもよろしく願います。

11、少しだけ昔の話を

「新宮 沙耶、さんですね？」

突然かけられた声に、驚いて振り向けば、そこには見知らぬ年配の男性がいた。

学校の帰り道。クノスが待つてるだろうな、と思って早足で歩いてきたときだった。

休日ということ、いつもより早く切り上げてきたおかげで、まだ夜の帳は下りず。

暮れ行く空を背景にして、もうすぐ夏だというのに、目深まぶかに帽子を被ったその人は、いかにも怪しそうに見えた。

「…どちら様でしょうか」

多分、変質者を見るような目つきになっていたんだろうな。

その人は、慌てたように「あ、怪しい者じゃありません」と言っ、帽子をあげた。

その顔は少し、どこかで見たような。そんな気がして。

「初めてお会いしますが、沙耶さんの父君の親戚なんです」

困惑した顔をしたままの顔で、その人はそう言っ。

そして誰かに追われているみたいに、きよろきよろとあたりを見渡す。

なんなんだろう、この人。

お父さんの親戚？…そんな、まさか。

「…親戚？」

「そう、突然で申し訳ありませんが。魔法世界とは関わらないほうがいい。父親の二の舞になる。それだけ忠告したくて」

「っ、…え？」

「それでは」

「え、ちよっと！」

そのまま、その人は踵をかえして、雑踏にまぎれてしまい。
私は、ポカンとその場に立ち尽くして。

そこには、謎だけが残された。
たださつき感じた既視感、父さんに似ているせいだと、ふっと気付いた。

私には、父も母もない。

両親とも、私が高校三年のときに、交通事故で亡くなった。
ハンドル操作を誤って、崖から転落。即死だったと、警察から聞いた。

なんで両親は、あんな山中に行つたのだろう。

大学も決まっについて。新生活が始まるうってときに。

私の生活を、本当に一変させてくれた。

幸いなことに、保険金が多額に入ったことと、奨学金がとれたことと、母の妹にあたる叔母が親切に面倒を見てくれたおかげで、

無事に大学も卒業も出来たし、こうして大学院まで行ってるけど、
帰る家がないことが、たまにどうしようもなく淋しくなることはある。

「どーいうことよ、父さん……」

ゆっくり湯船に浸かりながら、溜息をつけば、それと一緒に愚痴じみた言葉もこぼれた。

ぴちゃん、とどこかで水滴の跳ねた音がする。

疲れた身体を休めるにはお風呂しかない！って言って、クノスを置いて、一人でお風呂中。

でも、それはただの言い訳で、本当は今日の帰り道に会った人のことを、一人で考えたかったから。

「父さん、親戚いないって、言ってたじゃん……」

確かに、あの人は母さんじゃなく、父さんの親戚だと言った。

けれど。父さんは、自分で親戚はいないって言ってたんだ。

親も早くに亡くなって、兄弟もいないって。もしかしたら、父さんも知らないような遠縁の人？

確かに、父さんに似ていたし。親戚だって言われたら、納得しなくもない。

でも、それなら私の名前をどこで知ったか分からなくなる。

父さんを知ってるならまだしも、父さんが知らない遠縁に、誰が娘の私の名前を伝えるっていうの？

…調べられたの、かな。

そう考えて、一瞬背筋に寒いものが走った。

見知らぬ人に、あれこれ自分のことを探られるのは、あまり気持ちのいいものじゃない。

そして、なにより。

なぜ、あの人は『魔法世界』と私の関係を知っているのか。

父さんの二の舞って、どういうこと？

彼が、遠縁として私のことを知っていて、さらに魔法世界に属する人なら、私と魔法世界の間接を知っていても、それほど不思議はないけど。

でも、それなら向こうの世界で声をかけてきそうなものだ。

だいたい、向こうとこっちで時間軸がずれているんだから、『魔法世界』を知っている私が六月時点でいるって、なんで分かるの？

もともと私を遠縁と知っているのに、何故今になって声をかけてきたのかも分からない。

本当に、彼は一体何者なのか。

「父さん、化けて出てきて、教えてよ…」

何故か自分のことを知っている見知らぬ人より、幽霊でも父さんのほうが怖くない。

本当に、両親がなくなってから六年も経つのに。今更、親戚なんて言われても困る。

叔母さんもきつと知らないだろうし。

「あ。」

今更ながら。私は、自分の正体がばれていることと、正体がばれてはいけなかったことに気付く。

そうだよ、魔法の改正作業に呼ばれて。

極秘だから、身分を隠して魔法学校にいるのに。

…名前も変えなきゃいけなかったんだなあ。

「クノスに伝えなきゃ」

そんでもって、クノスに相談してみよう。

ざぱあと勢いよく、湯船から上がって。私は、一人で悩むお風呂タイムを終了した。

「は？ばれた？」

「そう、だと思っ。少なくとも、私が魔法世界に行ってることは知ってる」

「…おかしいな」

「まあ、こっちで私のことを知ってて、向こうで見つけたのかなって」

「…んー」

クノスは相変わらずふよふよ浮きながら、難しい顔をして考え込んでいる。

なんだろう、確かにおかしい点は色々あるけどさ。

海斗も、こっちでの私を知ってたみたいだし、まあないことじゃないと思うけど。

「でも、すごい確率だよな」

「なにが？」

「だって、たまたま抽選にあたった私の遠縁に、魔法世界に関わる人がいたってことでしょ？」

どうも、魔術を持つ人って、あまり多くないみたいだし。

私に親戚が少ないことも合わせると、なかなかすごい確率じゃないかと思うんだけど。

「…遠縁？」

「あれ、言わなかったっけ？その人、父さんの親戚だって名乗って、本当に多分そうだと思う。父さんに顔似てたし」

「…嘘だろ」

そう私が言った瞬間、クノスはすうと青ざめて。

何か、よくないことでも起こったみたいな。

「そんなはず、ない」

その声は微かにふるえていて。

ひどく困惑した表情に、こっちが困ってしまう。

確かに色々おかしい点はあるとは思っけど。そこは否定しなくてもいいんじゃない？

「沙耶の親戚？…父方の？」

「なんで？」

たまたま抽選にあたった私の親戚のことを、なぜクノスが否定できるのか。

…もしかして、まさか。

抽選とかじゃなかった…？

「なに、って何が」

「魔法の改正作業、法科大学院生の中で抽選だったんだよね？」

「…あ、うん」

「どうして、私の親戚に魔法世界に関わる人がいることが、そんなに驚きななの？」

私の背景を知っていて。それで、私を『選んだ』のだとしたら。それは、何の目的のため？

…父さんの二の舞、って本当にどういことなんだろう？

「……」

「クノス、答えて」

「抽選、だよ。その後で沙耶の背景^{バック}、調べたから。だから、思いがけないこと言われて、驚いただけ」

「本当に？」

「嘘言っても、しょうがないでしょ」

そう言つて、クノスはいつもどおりに、ニコツと笑つて。

でも、今の私には、それがひどく嘘くさく見えた。

「…信じていいの？」

「信じてよ」

クノスしか、信用できないこの状況で。

クノスのことを信じきれない現状が、悲しい。

それでもきつと、私はまた魔法世界へと行かなきゃいけないんだろ
うな。

「…そうだよね」

「もう、そんな暗い顔しないでってば！」

にこにこ笑うクノスが、少し空元気のような気もしたけど。

クノスを信じないことの方が怖くて、私も無理矢理、笑顔を作つた。
けど、どうしても、「父さんの二の舞」の言葉の意味を、クノスに
尋ねることは出来なかった。

それは平穩に投げられた、ひとつの小石。

11、少しだけ昔の話を（後書き）

遅くなった上に、なかなか話が進まずに、申し訳ありません…。
次回からは、魔法学校に戻ります。

『日常話』を、そろそろ返上しなきゃかも…。

お気に入り登録、評価、ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4612t/>

魔法の法律的解釈

2011年10月12日02時56分発行